島尾敏雄作品集

4

晶文社

島尾敏雄作品集　第4巻

昭和三十七年八月三十一日初版
昭和五十二年三月二十日十七刷

著者　島尾敏雄
発行者　中村勝哉
発行所　株式会社　晶文社
東京都千代田区外神田二―一―一二
振替口座東京六―六二七九九番
電話東京(二五五)四五〇一
印刷　株式会社堀内印刷
製本　有限会社美行製本

© 1962<検印廃止>　落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

われ深きふちより　一
狂者のまなび　一五
或る精神病者　二六
重い肩車　四六
治療　五九
のがれ行くこころ　七一
転送　八七
ねむりなき睡眠　一〇六
一時期　一三

家の中　一三五
離脱　一五一
死の棘　一七〇
崖のふち　二二三
鉄路に近く　二四一
日は日に　二五二
島尾敏雄年譜
奥野健男・解説

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

われ深きふちより

私たちがまだ外来で神経科の診療室に通つていた時分、私は神経科の病棟から精神科の病棟を遠巻きにして眺めながら、暗い気持に陥ち込んで行くのを防ぐことができなかつた。

私の心もからだも妻の神経症にうちひしがれていた。その反応の発作の時の論理は強靱で、その論理に従う限り、妻も私も生きていることはできなかつた。追いつめられると私は醜く逆上して何度も紐をとつて自分の首をしめにかかつた。すると妻は南島の伝説にある水陸両棲の動物の「けんもん」のように膂力が強くなつて私の力を奪い私の首から紐を外した。ふつと襲いかかる魔の瞬間を外すと私には生への執着がどつとやつてきた。そのあとには妻の方に危険な自殺の誘惑がやつて来て私の神経はくたくたに疲れた。

私と妻とはその頃半年もの間殆んど、お互いが片時もそばを離れることができなかつた。そのために勤めていた教師の職は放棄し、物を書く余裕もないので生活は眼に見えて逼迫した。

私には既に世間というものがなくなつてしまつた。ただ、妻の神経の表面にメタン瓦斯のように限りなくわき上つて来る疑惑のいらだちに、寝ても覚めてもいや真夜中でさえもお互いが顔をまともにつき合わせて、その日その日が移り変つた。

治療のききめは殆んど認められない程なのだ。既に性格の一部になつてしまつたのではないか。私にも妻にも、そして子供たちにもそのいくらかは、未来というものの貌が考えられなくなつた。

長い間私たちは神経科の診療室に通つた。その途中の電車やバスの中で、私たちは幾度醜い言い争いをしたことだろ

う。人混みのプラットフォームで突然私は妻の平手打ちを受け、私はかつとなり又妻に平手打ちの仕返しをしたことがあつた。妻が一層物狂おしくなると私は方途を失い、逆に電車の中を大声で妻の名前を呼んで歩き廻つた。私は妙に執拗になり運転台近くにいる妻をその反対の端の方から、名前を呼んでいつまでも手招きしていると、妻は仕方なしに子供の作り笑いのような顔付になつた。(そのゆがめた口の端の印象が妙にいつまでも心につきささつた)妻がそばにやつて来れば、私は又その反対の方によろよろ歩いて行つた。車内の人はみんな私たちを見た。近県から都心に出て来る野菜売りの百姓の女房たちが、袖をつつき合いみだらな笑いを浮べているのが眼に残つた。私はもう前方が見えなくなつてしまつたように思つた。

しかしとにかく私たちは効果のはつきりしない治療を続けてしてもらう外に方法とてなかつた。憑きものが落ちるように正気に戻つてくれないだろうか、などと私は道端の石くれにさえ祈りかねなかつた。先頃の戦争の時特攻兵だつた私が、突如として沖縄島が海中深く陥没することを願つたように。

神経科での妻の長い治療を待つ間、私は蟻地獄の巣のすり鉢の斜面を歩き廻つているような、救われようのない淀んだ憂鬱な状態で時間を消していた。一方では成るべく治療の時間が長引いた方がいいと思つたりしながら。とにかくその間だけは妻が信頼している医師の手中に妻をゆだねていることができたのだから。しかしやがて又帰途のびくびくした道中が続き、次の治療日までの耐えがたい希望のない状態が、なだれ襲つて来る暗雲のように背後に覆いかぶさつていた。

小さなコンクリートの用水池のふちにしやがんでじつとにごつた水の面を無意味に見つめていたり、苔蒼の四枚葉を探してみたりしても、刻々がいつもぶつぶつ断ち切れていた。診療室の暗幕のかげでベッドに横たわり、眉根を寄せて絶え入るような、ききようではうつとりとしているような訴え声で、めんめんと自由連想を言葉にしている、異常な宙空に浮き上つた妻の世界のことを考えると、可哀想で仕方なくなり、自分は汚辱にまみれても、彼女の憑き物のしもとを黙つて受けなければならないと思つた。

私の眼の前には精神科の棟の低い女病棟が風雨にさらされて黒ずんで横たわつていた。

扉はすべて固くとざされ、窓にはこまかく木の格子や金網が張つてあつたり又鉄格子がはめてあつた。内部はうす暗く、或いはうす暗い家族館の室内で水槽の中の奇体な熱帯魚を見るような具合に、格子の向うに患者たちの顔が集つたり離れたりふわふわしてうかがえた。

時として病棟の中を怪鳥のような高笑いが吹き抜けて行くことがあつた。

すると私は多分病棟の中の廊下を髪もおどろの気違い女が哄笑して走つて歩くだろう姿を眼の底に思い浮べたのだ。

それは如何にも人生の悲惨事、というふうにも思えた。恐らくは精神病は治癒の見込みはないであろうというふうに思われた。精神病を治療するということはどういうことなのか。それは暗い重苦しい思いなのであつた。

精神病棟の中に収容されているであろう沢山の患者の女たちが、そこに入れられるまでの未だ普通の生活をすることができた日々のおだやかな日常の姿態などを、私と妻の過去の日々のそしてこのようになつてしまつた成行の細部とで補つてみると、どつとばかり胸がしめつけられて来るのであつた。もう過ぎてしまつた日の平穏な何気なさは取り戻すことができない。過ぎてしまつた日々は再び戻つては来ない。頭がそのことだけに囚われると、視野の隅から墨汁を流し込んだような暗さが、重く圧しつけて来る。

世間の何気ない多くの営み。それがどれもこれも、恐ろしく深い、そして抜け出ることのできない淵に臨んでいるように思えて来て、私はいたたまれぬ思いにさいなまれた。

「ほらほら、西病棟のおつるさんが笑い出したわよ。あしたは雨かな」

看護婦たちの言葉が私の耳にはいつて来た。こんな冗談の言葉がまだあつたのだと私は思つた。看護婦たちに深淵は気付かれてはいまい。私たちにそのような日が帰つて来るか。私は益々孤独に追いやられた。私は泣き出しそうな顔付になつていることを知つた。しかし泣き出さずに止まつているより方法もない。

どうしてか病棟の向う側に廻つて見たかつたのだ。向う側がどのような作りになつているかは分らなかつた。

「無用の方は近付かないで下さい」

と書いてある立札が妙に魔力を持つていた。その制止の文句、それを書いた人たちの姿勢に、というよりも私は精神病者たちとの隔絶の感じに独り相撲をしていたのかも分らない。

それだけ一層そつちの方に何か大切な鍵が置かれてあるようにも思えた。向う側のその方に精神病者の病棟の内部が、あからさまに口をあけているように思えた。

思いきつて私はそちらの方へ近付いて行つた。

近付くと窓の下には冷え冷えとした空気があるように思えた。窓の内部はうす暗くて何も見えなかつた。物置のような感じがした。その暗い中にうごめく物を見るのは躊躇された。窓の下のあたりにはせと物や刃物のかけら、かみそりの刃などが落ちていて、思わず足のうらを切り込みそうな感じ

がした。見廻したところそのようなものは見当らなかつたけれど。私はつま先立てて歩いて、そろそろと向う側に廻つて行つた。誰かにとがめだてされそうに感じながら。

向う側には又別の病棟が建つていた。その向う側にも又別の病棟が建つているようであつた。それは迷路の中の建物のように、私には隠されているように思えた。

高い所に窓がついていた。そこはみんな鉄の格子がはまつていた。つと青白い顔が動いた。

私は眼を伏せ、そちらを見ないようにした。そしてこちら側の、今廻つてきて見ようとしている病棟を、いきをこらして見た。

いくつもの部屋に、一つずつ窓がついていた。とつつきの部屋には誰もいないようであつた。

おや！　この病棟は既に廃棄されてしまつたのではないか。ふと私は不吉にそう思つた。

そして次の部屋の窓に眼を移して私は思わず立ち止つたのだ。

若い女が格子に両手をからませて私を見ていた。私の来るのをずつと前から待ちあぐんでいたようにも思えた程に、その女は私の視線をつかまえた。

そして声をたてずに、かすかに笑いかけようとした。

（私は電車の中で無理に笑い顔をつくつて車中の人々に私の醜態をつくろつてみせた妻の声のない笑いを思つた。いつまでもそのぎこちない笑い顔だけが抽象されて、可哀想に可哀想にという気分に私を誘い込んだ）

思わず私は歩を返した。

顔は恐らく、却つてこわばつた。

そしてどんどんもとの神経科の病棟の方に帰つて来た。

私はぐつたり疲れた。どうすればよかつたのだろう。もう少しどうにかやわらかな様子をその患者に示すことができなかつたものだろうか。

素直な束ね髪と、明るい柄の着物と、まだ若いその女の感じで、私は結婚したての、都会から離れたいなかの古い家につれて来られた若妻ではないだろうかなどと妄想した。

眼がたよりなげに疲れているのが、妻のあの視覚ばかり鋭敏になつて発達してしまつた皮膚のうすい熱つぽい、自らを統御できなくなつた困惑に満ちたまぶたに一種の幼なさをただよわせた眼を、思い出させた。

窓の格子につかまつて、その若い女は何を考えていたものか。そしてその女にどんな将来が訪れてくるものか。

私は又どうして病棟の向う側を見になど廻つて行つたのか。私は手を振つて、その印象を払いのけようとした。

私の今は、むしろ自分であらゆる周囲から隔絶していないと苦しくてたまらないと思い込んだりすることが多かつたの

だ。しかしそれは妻の中に巣喰つてしまつたもう一人の別の妻のおさえられない発作に対しての、向けようのない抑圧してねじ曲げた抗議の別の姿であつたのかも分らないのだが。

しかし、やがて私たちは、入院しなければならないことになつた。しかも色々な都合で神経科の解放病棟の方にではなく、閉ざされた精神病棟の方にはいることになつたのであつた。

私はも早、病棟の外から遠巻きにするのではなしに、その内部にはいり込み、格子に手をつかまらせて、窓の外の世界を眺める側に廻つたのだ。ただ私も一緒にはいるために、あの女だけの病棟は具合が悪く、男の病棟に廻されたのだけれども。

ちらと垣間見た向う側のその奥の方には、私が見たよりもつと多くの病棟が建てられていて、医師や看護婦や使丁たちが、扉の錠前をあけるための鍵を腰のへんでがちやつかせながら歩いていたのだ。

住んでしまえば別にそこで秘儀がふんだんに行われていたわけでもない。患者たちへの私の手さぐりの追求、横たわつていると思つた断絶の淵、発作の時の叫び声、言葉の通じなさ、窮屈で固着した執心、亢奮と誇張、唐突さ。要するに精神病棟に入れられた私たちに、わあつとばかり取巻いて来た何か濃密な弾力性のある、新鮮なおどろきを伴つた気体は、時がたつにつれて次第に稀薄になつてしまつたのも当然かも知れない。

はじめの間、私は彼らと同じ患者仲間と目された。尤も男の病棟に、女の患者がまさかはいつて来たのだとは思えないだろうから。

私はむしろ、病棟の外の世間での気疲れがなくなつたばかりでなく、人口の扉におろされた錠前のために、執拗に襲いかかつて来る外部からの諸々の悪意が遮断されてしまつたと思つた。妻の神経に巣喰つている憑きものさえ追い出してしまえば、当分は妻と二人きりでこの病棟の中でくらしてみてもいいと思つた。

既に私は、大つぴらにわめきたい時にわめきちらし、妻と廊下の追いかけつこをし、一晩中ぶつぶついさかいをし、又突如として妻の発作が（いやいつのまにか私もいささか発作的になつていたのだが）解消するとすぐ、肩を組んで廊下を歩き、お尻を支えて便所通いをし、凡そ世間の妻のすることは総て私がやり、妻は私を呼び捨てて鷹揚に振舞い、私は嘻々としてこまめに奉仕することができた。

それは世間では或いはおかしなことであつても、ここではそのために拘束される何ものもない。いやそれは誇張かも分らない。次第に患者たちの癖に馴れてくると、彼らの言葉が分るようになり、叫声におどろかなくなり、亢奮もおそろし

くなくなつて来ると、ここにも矢張り扉の外の世間がもぐり込んで来ていないことはなかつたけれど、亢奮がおさまつている時に彼らがいくら世間並の顔付をしていても、抗し難く襲つてくる自分の発作が、他人の発作を認めることになつているようであつた。いくら馴れてしまつても、やはりここでは、他人の発作に寛容であり、私はむしろ傷つけられること少く、誇高く生活されそうに思えた。

そこにはどんなに色々な症状の患者たちがいたことだろう。いやそれとても、世間と同じに色々なくせのある性格の人間の寄り集りと変りはなかつたかも分らないが、たとえばどんな性格の人であつても、きまつて或る時にがくつと尻ごみしてみせる一種のもろさを持つている。各自の発作に対する尻ごみが私を安心させてくれたのだ。からだの一部に治癒しにくい傷痕を持つた図体の大きな昆虫、といつた感じを私は彼らに抱くことができた。それには世間での生活に自信を持つた医師や看護婦や付添たちの振りまいて歩く器用な身ごなしには見つけることのできない、グロテスクな何かがあつた。しかし私はその不自由なぎこちなさに、安堵している自分の心をかくすことができない。ぶきつちよな手足で、背中の自分の傷をいじることのできない可哀想な虫。そしてその傷をいつも気にしてひけ目に思つている哀れな善人たち。しかしみんな世間では役に立ちそうもない人たち。

深夜病棟の廊下を歩くと、私は言いようのない亢ぶりに襲われるのであつた。

いくらか症状の重い患者たちは、同じ病棟の中で更に一方に集められて錠前をかけられていた。私はまだしも長廊下だけはいつでも自由に歩ける部屋にはいつていたから、そのように幾重にも錠前のかかつた建物の中で、他人の手にゆだねて眠つている魂たちの（勿論幻覚や不眠に襲われている者も少くはないが）身の上のことを考えると、悲しい気持に沈んでしまうのであつた。当直の医師や暁番で起きている看護婦たちも、まるで不可抗力に近い巨大な運命の歯車に、どれだけ逆らうことができるのだろうかなどと私は思つたりするのだつた。しかも私は妻の発作と闘うだけで、のめつてしまつていたではなかつたか。

或る晩、私はこんな夢を見た。

夜寝る時刻になつて、私たちの部屋の方も更に狭い区画に仕切られた上、扉をしめられ錠前をかけられることになつてしまつた。

私はそのことにかすかな満足があつた。私も愈々本物なみに扱つてもらえるようになつた。私は妻と同じように物狂う他には二人共深きふちよりはい上ることはできないと思うようになつていたから。いよいよ私も厳重にとじこめられる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

世間に戻る可能性が一つずつ切断されることに感傷的な寂しさがないことはなかつたが、からだがひきしまつてせい一ぱい生を燃焼できるのだと観念する所がむしろ強いように思えた。さあおそろしく思う人は、みんな扉の向う側に出てお行きなさい。私は皮肉に笑いをうかべて、あわてて消毒しながら自分の家に帰宅を急ぐらしい発作のない人たちを見ていたのだ。白衣の看護婦たちがぞんざいな言葉をまきちらして扉のこちら側に食罐や食器を運び入れると、あわてて外に出て行つてしまつた。早く出なさい、出る人は早く出てしまいなさい。私は口の中で調子をとるようにそう言つて（何か知らぬが病棟内に悪質の病菌が発生して、当分隔離しなければならないが、錠をおろされたこちら側ではおそらく全員その病菌に冒されることから免かれまい。廊下の拡声器がそのような意味のことを伝えていた）さわぎで少しずつ亢奮している患者たちと（和尚やおにぎりや、埴生さん、ムニャムニャ、感覚居士、七曲八曲うじ、サイタ、ワキノさん、グッツさん、ぼくちやん、にやんこさん、ユミャ氏、クッワ、誇大妄想、金魚の糞、ススムちやん、大学生、義侠紳士、反省青年、スピーカー、かばなどの顔が、馬鹿に個性的でなつかしく重なりゆらぎ、そして口をあけて笑つていた）閉ざされた世界でどんなふうなことになるか、不安がないでもない。閉じこめられれば閉じこめられる程妻は安堵するであろう。看護婦のCが「扉をしめますよ。もう出る人はありませんか」とにこにこ笑いながら錠前をかけようとする。「Cさん、そこで錠をかけたらあんたも中にとじめこられちやうじやないの」私が心配してそう言うと、Cが「ええそうよ。私は当番だから中に残るのです」「だつて今度はただごとじやないのですよ。どうして一人だけ残るのです。患者がみんなで暴動を起すか分りませんよ」Cはただのんきそうに笑つている。私はこの人はむざむざ犠牲になるのか、気の毒なことだとも又一人位そうする方がいいのだとも思つている。

私はすぐ眠を覚ましてしまつた。

この頃夢の筋は大いてい忘れてしまうのだが、この夢ははつきり覚えていて、妙に自分に覚悟がつくような具合に作用して来たのだ。

しつこくまとわりつく妻の反応。過去をぼやけさせるために施した色々な治療は、大方過去をぼやけさせることに或程度成功したが、かんじんの心因となつたいやな記憶だけは一層鮮明に濃く焼付き、しかもそれは既に奇怪な形に変貌してしまつているのに、妻はそれを知り分けることができない、というようなことになつているのであろうか。

その日の朝も私は妻の寝返りを打つたらしい気配で眼が覚めたが、しばらくはいきをひそめて様子を伺つていた。

それは折角眠つているのに声をかけて起こしてしまうと、またその日一日、眼覚めている限り頻発する反応の発作との格闘をはじめなければならないからだ。それを私は避けることはできないが、はかない気安めで、一分でも先にのばそうという気構えになつてしまつた。(一日のうちで上厠の間だけが自分自身になりきつていられる、と思つた)だから、あわてて起き上つて妻を眼覚めさせ発作の可能の多い時間をわざわざ呼びよせることはないように思つた。

しかし私は妻が既にもう眼が覚めていて、襲い来る妄想や幻覚と苦闘していることも察知していた。

私は思いきつて大きな動作で起き上つて妻を呼んだ。

「ミホ、もう起きているの?」

「うん」

私は妻の一顰一笑にはかりをかけている。発作の徴候が認められないかどうか。だが徴候を未然に知つた所で私にはそれをどうすることもできない。スコールがやつて来て通り過ぎて行くのを(その時間がいかにも長過ぎたが)ただ黙つて見ているつもりになる外はない。いやただ黙つてではなくて、妻の発作にあおられて、私まで醜くさわぎ出し、それが又お互いに反射し合つて、とめどなくもつれ合う所に陥ちて行くより仕方がないふうになつてしまつた。しかしその朝はむなしい努力だと思いがなら、積極的に攻撃して行こうと思つた。

「ミホ、大丈夫?」

私は先ずさぐりを入れてみた。

「ううん」妻はあいまいな返事をした。眉根をきつくして、瞳を上眼に開いたまま固定させているに違いない。

私は妻の昨夜の発作で寝不足のだるいからだを鞭うつて起こし、足首や膝の関節がくじいたように痛むのをがまんして、妻のベッドの方に移つて行つたのだ。

しかし妻が既に発作の門口をうろつき迷つているのが私に分つただけだ。いやなもの、怖ろしいもの、避けた方がいいものの方に、わざとずるずる引き寄せられて行くのを止めることは頗る困難なのだ。妻を発作の門口からもつと開豁な場所に連れだすことは私には殆んど不可能であつた。そこから気持を転換させようとすると、却つてそちらの方に向きたがつた。そつとして置くといつまでも停滞した。早く通り過ぎようとして急ぎすぎると、そうする私を疑つて無理にとどまつた。どうしてみたところで、つまりは、その中にはいり込んでしまわなければ仕方がないようになつてしまつていた。

私は嘔きそうな絶望の中で尚妻の気持を何気ないものの方にそらせようとして話のつぎ穂を見つけ出しては話しかけるが、近付いている不気味な大渦の流れが確実にゆつくり吸い寄せられるように、結局は妻の発作の中に巻き込まれてしま

う。

きつかけはほんの些細なことからも始まる。その朝のそれは私が妻を一度も映画や芝居に誘つて連れて行つたことがないということを悪臭のある瓦斯がどぶの底から醱酵して来るようにぷすつと思いだしたことだ。

何故連れて行かなかつたのか。ミホを何だと思つていたの？

私はぐらぐらと赤土の崖からころげ落ちる頼りなさに襲われて来る。問題はそのような所にはないのだが、私はもう十箇月もの間固着した同じような質問に答弁することを強いられ、それがもつれて行き、私の過去は白々とあばかれ、収拾がつかなくなることを繰返している。ああはじまつて行く、はじまつて行く。そう思うと頭はくらみ、妻の顔にも憑きものだけが跳梁し、私ののどもとには身勝手なむごい言葉が次々とつき上つて来る。そしてそれをとどめることができずに口に出してしまう。

「女房は連れて行かなくていいんだ」

「ちきしよう」

妻の憤怒の形相が覆いかぶさり、私の左の耳の所に思いざま平手打ちを受けるのだ。

私はぱつと起き上つた。

「何をするんだ」私も眉根はつり上つて妻を力まかせに打据えたいと思うのだ。しかしその時私は妻の表情にある親和な気配を認めたのだ。（親たちの入院のためにさい果ての南の孤島の親戚に預けられている二人の子供たちを、私はかつて叩いたことを痛く思い出し、その二人の子供が妻のからだに重複したような気がした）妻のからだに甘い牛乳のにおいをかいだ。私は思いとどまつた。私は妻を子供たちにしたように、ベッドの上にうつ向けざまに押さえつけ、まるい尻を三つ四つ続けて叩くと、子供の尻を叩いているような錯覚を起したのだ。妻は叩かれまいともがいたが私にはにこにこ笑つたようにも見えた。もうこれでおしまいにしましよう、そう言つているようにも思えた。私は妻がいとしくなり早く二人の子供たちと一緒のさりげないなごやかな日常を送りたいと思つた。私はいきをはずませて立ち直るとむしように汗が流れるのではだかになつてからだをふいた。

「ちきしよう、よくも叩いた。よくもその、その汚れた手でミホがぶてた。一生覚えていてやる」妻は上気した顔でそう叫んだ。私はいくらふいても汗が出た。中途で私はカッターシャツをきちんと着ようとした。「よし覚えておれ。今度こそミホは死んでやる」妻は身づくろいを始めようとした。

私はしまつたと思つた。私たちはそういうことに関しては甚だ危険な状態に近づくことがあつた。私はあわてふためき、そうすると余計にくにくしげなかさにかかつた態度にな

つて、妻に近寄り耳こすりするようにして、
「そういうことは黙つていてやるものだ」
と押しつけるように言つたが、私はその自分の言葉に亢奮し、
「お前がそうする前に、どういうことか俺が手本を示してやる」
そう言つて妻の寝巻の木綿の帯紐を（それは強いので、いつか妻がベッドにくくりつけて首をしめた時、結び目がとけず私はあわてふためきその端を小刀で切つた）す早く自分の首に巻きつけ、ぐつと両手で引つ張つた。
妻ははじめそ知らぬ顔をしていたが、紐が食い込み、顔がどす黒く呼吸がぜいぜい言い始めると、ぱつとむしやぶりついて来たのだ。
私たちはそこでとつ組み合つた。
「FさんFさん来て下さい。トシオが乱暴をするんです」
妻が叫ぶと、隣室の付添が来てくれたのだ。
「トシオが私を殺そうとするんだ。患者に向つてこんなことをするんだ。そんな大馬鹿な付添があるものか」
私はあとをFさんにまかせて部屋を外すより仕方がない。
私は浴室の広い窓の所に行つて、格子に取りすがるようにして、外のあくまで明るい景色を眺めた。からだのふるえがいつまでもとまらないのだ。私はそのために妻に殺されることを悔いはしない。しかし同じ質問の繰返しには堪えることができないと、亢つた心で思つた。しかし激動と共にかすかに心の鬱屈がとれていることも認めないわけにはいかなかつたのだ。あとで妻の気持をもとに戻すためには、長い時間と薄い氷の上を歩くような抑圧とが必要なのにも拘らず。
果して妻の気分のぐずつきは尾を引いたが、その日の午後私たちは精神科の病棟を出て、神経科の診療室に治療を受けに出向くことになつていた。
それは今の私たちにとつてやはり至上命令であつた。その時刻が近づくと妻はふしようぶしよう身繕ろいを始めた。そして私たちは看護婦に錠前をあけてもらつて精神病棟の外に出た。
二人にとつては外部の明るさも、白い夏の入道雲も庭の草木も、いささかのなぐさめにもならない。かつと照りつける真夏の陽の光も、私たちの脳のひだには分厚くかげつて来て、私たちだけが世界から疎外されてしまつているという感じが濃厚であつた。
妻の顔は蒼褪めて、急にふけてしまつたようになり、ずんずん先に立つて歩いた。
そびらを見せ合つた私たちの心が優柔に夏の陽にむされた。この発作もやがては通り過ぎてくれるだろうけれども、

次々に目白押しにやつて来る発作の群が海原のように見えて来て……一体何がつかえているというのか。私は顔をあげて嘆息すると、太陽の直射がわつと網膜に広がつて眼の中は異様に彩色されたのだ。自分の蒔いた種は自分で刈りとらねばならぬ。しかし深い渦に巻きこまれずにどこまでも手足にまといつかれて泳ぎ抜けられるだろうか。いや、このような言い方は当を得ていないかも知れない。私は私の生まれつきを解体したい！　いやそのように感傷をぶちまけて見たところでどうなるものでもあるまい。私はやはりこのまま腐肉をついばまれていなくてはなるまい。宙ぶらりんのままで、どこに手足を支えよう術もなく。

医師の都合で、私たちはしばらく待たされた。

すきを見ては妻は私に寄つて来て、彼女の論理の中に私を引きずり込み、神経を逆なでした。私は黙つてそれを受けていなければならない。いや黙つていては発作を益々けしたてる。妻の論理に調子を合わせなければならない。そうするとついつまずいてしまう。私は妻のそばを離れようとする。すると妻はわざとついて来る。「どこまでもついて行つてやるよ。ひとを気違いにして置いて。もとにして返せ」私と妻は構内をぐるぐる歩き廻らなければならない。陽はかーつと照つている。神経科の病室からこちらを見ている者がいる。

と、レコードの音楽を私は耳にした。床板をふみならし又引きずるようなにぎやかな雑音がまざつていた。

思わずそちらの方に近付いて行くと、私はそこに精神病者たちの風変りな円陣踊りを見たのだ。

何といつていいか、強烈な色彩、そんなふうに私の眼にとび込んで来た。切り千代紙の函をぶちまけたような、原色の色どりが視野の外にはみ出そうとするような感じ、しかし落着いてよく見ると、そんなにけばけばしい色あいを見つけることはむしろ困難であつたのに。それはその中に女の患者も交つていたせいかも知れないが、それとても口紅や頬紅を濃くつけていたというわけでもないのに、一種のけばけばした感じが、うわつと私を襲つて来たのだ。もうその人たちの中で生活し、その人たちの色々なことにかなりなれていたのにも拘らず。

そこにはあらゆる年恰好と服装が混淆していた。男の患者で言えば、高等学校の生徒位の者から頭が白くなつた爺さんまでが、よごれた浴衣がけのおしきせの白衣、長ズボンにカッターシャツ、戦争のときの短ズボンや戦闘略帽或いはメリヤスシャツにステテコなどにそれぞれ身を装つていた。女の多くは洋服を着けていた。着物を着ている者は少なく、紺絣に赤い帯をしめ手拭をかぶつている人と雨衣とも上つぱりとも見える灰色のコートを着物の上から着ている人位であつた。（いやもう一人、踊りの輪の中にはいろうとしないで部

屋のすみの長椅子に腰かけてじつと踊りを見ていた患者が着物であつた。それはいつか私が、外来で妻の治療のすむのを待つている間神経科の方からおそるおそる精神病棟の方に近付いて行つた時、格子につかまつて私の方を見ていた若い女、その女に違いない。しかし今は私はあの時の不馴れなしかし感傷的な感情は残つていない。私は遠巻きの逃げ腰の観察者ではなくなつた。珍奇なものを見るような目付もないし、怖れの感じも少くなつた。そこにただ脳が悪くてなやんでいる目立たぬ一人の女を見たに過ぎない。これは後のことだが、地味なブラウスを着たその女が廊下を軽そうに走りながら陽気な調子で歌をうたつているのを格子の外からかいま見たこともある）そのほかは簡単なワンピース、襦袢に似たブラウス、腰紐で結んだスカート、タイツやひだの多いスカートなどを、それぞれ奥様風に百姓女のように又娘のように、女子学生や食堂の女給仕そして女事務員のように、或いは女房風やおかみさん風に着けて（そのどれもひどくそれらしく見えるのが不思議であつた）人さまざまに清潔そうに又だらしなく円陣の中にまざり込んで踊つていた。私は彼女たちの発作の時の様子も恐らくは想像し了せる。しかし今は発作を潜在させて何喰わぬ気につくろつている。誰もがどこかに偏執的な何かの痕跡がある。それは男の患者も同じように自分の手のとどかぬ所の病的な傷であつて、それになやまされながら、その部分が羽ばたいてあばれるとき、どうしようもなく醜いもだえを露出させる。それが通り去ると、世間には通用しそうもないつつましさで、どこかちよつとおかしく身繕ろつている。その殆んどが、身ごなし手振りにぎこちなさのあることが一種のおかしみをこしらえていた。ぶちこわれ人形がかたかた動き出したような。しくじりは一所懸命にとり戻そうとして、調和は一層乱れるのだが、その乱れが私にはある快さを与えてくれた。

患者の持病の誇張された表現が、いろいろな人間のタイプのギニョール人形のように、がつくりがつくり踊り廻つた。

私はその中の何人かの顔と様子とに馴染んでいたのだ。彼らの背負つた、私には未知の過去の生活が、満更知らなくもないような具合に、ひどく想像力を豊かにしてくれたのだ。

殊に西洋風の円い輪の踊り。男と女が一組ずつ手をとり合つて、全体が輪になり、軽快な音楽に合わせながらぐるぐる輪を廻して行くのを私は好んだのだ。

立ち止つては交互に足ぶみをし、又くるりと廻り、対手を指差したり、そのあとで男が女の背後から抱くように手をつないでスキップして歩くのが、それぞれの個性をあらわにして面白かつた。

殆んど汗をかかんばかりにして、ぐるぐる踊り廻るその踊りを、眼を固定して眺めていると、私の視野に正面になる踊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.